

第 15 回 会長の時間 「4つのテスト」につきまして H28.11.17.

先週、地区大会の報告をしましたが、メインテーマであった「4つのテスト」について少し補足したいと思います。在籍年数の長い方はご存じと思いますが、新しい会員もおられますし、職業奉仕の理念を端的に表すものとして重要な項目ですので、このテストが作られた経緯についてお話しします。

1929年から始まった世界恐慌の時期に、一人のロータリアンが4項目からなる簡明な倫理指針を考案しました。この4つのテストの創案者は、ハーバート J. テーラーで、ロータリーの資料によると1893年に米国ミシガン州に生まれ、イリノイ州エバンストンのノースウエスタン大学を卒業しました。卒業後は仕事の関係でフランスに渡りましたが、1925年にイリノイ州に戻り、シカゴのジュエル・ティ社に入社、とんとん拍子に昇進し、シカゴ・ロータリークラブの会員となりました。1932年、ジュエル・ティ社の次期社長候補でしたが、破産寸前状態にあったシカゴのクラブ・アルミニウム社の再建を依頼されました。この会社は、調理器具メーカーで、総資産額を40万ドル上回る負債を抱え、倒産の瀬戸際にありましたが、この難事業を引き受け、危機に瀕したこの会社に自らの運命を託しました。彼は、ジュエル社を辞め、これまでの給与の8割減という収入でクラブ・アルミニウム社の社長に就任しました。テーラーは、大不況の中で、低迷している会社を再生させるには、同業者にはない何か新しい理念を育成しなければならないと考えました。そこで、テーラーは、「社員の人格」「信頼性」「奉仕の心」というキーワードを選びました。そして、社員たちに倫理的価値観の目安となる指針としておよそ100語からなる文章を作成しましたが、これでは長すぎると判断しました。そこでさらに推敲を重ね、それを7つの項目にまとめました。4つのテストは当初は、7つのテストだったのです。

しかし、これでも長いと考えたテーラーは、それを自問形式の4項目にまとめ上げ、それが今日の4つのテストとなりました。すなわち ①真実かどうか ②みんなに公平か ③好意と友情を深めるか ④みんなのためになるかどうかの4項目です。テーラーは、できあがった4項目を会社の4部門の部長に検討してもらいました。4人の部長は、それぞれ宗教上の立場は違いましたが、全員このテストが、自分たちの宗教上の教義に反しないばかりでなく、会社や個人の生活にも模範となる価値観を与えてくれると賛同しました。この4つのテストは簡単な言葉ですが、クラブ・アルミニウム社の苦難な時期を支える基盤となりました。会社の広告も、このテストに照らし合わせて検討し、最上とか極上などの表現を避け、製品の実際の姿を端的に述べる形に変わりました。ライバ

ル社への非難、悪口は、広告や販売促進パンフレットから姿を消しました。従業員は4つのテストを暗記するよう求められ、仕事のあらゆる面における指針となりました。その結果、信頼と好意の雰囲気、取引先や顧客や従業員の中にも生まれ、会社の業績が次第に好転してきました。5年後の1937年までに40万ドルの負債は、利子と共に完済され、その後15年間で、会社は株主に対して100万ドル以上の配当を行い、その資産は200万ドル以上にもなったとのことです。

その後、テラーが、RI創立50周年（1954-55年）に国際ロータリー会長に就任した際に、4つのテストの著作権をすべて無償でRIに移乗しました。この4つのテストは、今日では、100カ国以上の言葉で翻訳され活用されています。2007年の規定審議会で、クラブ定款第12条第5節に「4つのテスト」が明記されました。現行の「4つのテスト」の和訳は1954年東京ロータリークラブの毎日新聞社長の本田親男氏によるもので、以来日本人ロータリアンの座右の銘となった名訳と言われています。「4つのテスト」は職業倫理基準としてだけではなく、ロータリアンの私生活を含めた人生全般の行動基準とされています。ロータリーの友の記事によりますと、日本のあるクラブの話ですが、にわか雨に降られてしまった通勤客たちに傘を貸し出すプロジェクトを企画しました。しかし、通勤客が借りた傘を返してくれるかどうか不安でした。そこで、ある会員が、傘の内側に4つのテストを印刷することを提案しました。数か月後、傘は数多くの人たちに利用され、すべて返却されたということです。このことは、4つのテストが一般の人に対しても倫理的な誠実さを導く普遍的な力があることを示しています。簡潔さの中にも多くが語られ、最終的に成果へと導いてくれるこの4つのテストは、不確実性に満ちたこの世の中で、未来展望を与えてくれる指針だと思います。

本日は、「4つのテスト」についてお話をしました。